

AAC2022 美術旅行レポート



AAC2022 最優秀賞

「千種万花」

平尾 祐里菜

広島市立大学大学院

2022 美術旅行レポート

工芸

と

古くもの



2022 美術旅行レポート

日程	場所 展覧会名
3月28日(木)	MIHO MUSEUM 古代ガラス 輝く意匠と技法 gallery yamahon ヘルミナ アヌ・トウオミネン × 伊藤 尚美展
3月29日(金)	BANKO archive design museum Exhibition Vol.12 YOKINO 〈能野〉 - 南海の古陶 種子島焼 -
3月30日(土)	It BOOTLEG gallery 「盆」展示即売会 工芸青花 青花の会「うつわ」のいまと未来 白日
3月31日(日)	府中市美術館 春の江戸絵画まつり ほとけの国の美術

gallery yamahon

〒518-1325 三重県伊賀市丸柱 1650

MIHO MUSEUM

〒529-1814 滋賀県甲賀市信楽町田代桃谷 3 0 0

BANKO archive design museum

〒510-0032 三重県四日市市京町 2-13-1F

It BOOTLEG gallery

東京都新宿区改代町 40

工芸青花

〒162-0831 東京都新宿区横寺町 3 1 一水寮 101

白日

〒111-0052 東京都台東区柳橋 1-24-1

府中市美術館

〒183-0001 東京都府中市浅間町 1 丁目 3

このレポートでは古代ガラス 輝く意匠と技法 と「盆」展示即売会を主に取り上げ、展覧会を通して学んだことを記していく。

2022 美術旅行レポート



△ MIHO MUSEUM



△ gallery yamahon



△ BANKO archive design museum 入口



△ ポスター



△ 館内の様子

2022 美術旅行レポート



◁会場内の様子

▽「盆」展示即売会



◁工芸青花

▽▷会場となっている神楽坂水寮は昭和前期に建てられた大工寮であり、大工技法が随所に見られ、当時の大工の技能を高さを知らしめる。現在は文化庁の登録有形文化財に指定されている。



▽古道具屋「白日」



△美術館前の公園に鴨が沢山いた



△府中市美術館 ほとけの国の美術 看板

春季特別展

古代ガラスー輝く意匠と技法

MIHO MUSEUM

春季特別展 古代ガラスー輝く意匠と技法

3月3日(日)・6月9日(日) 10:17時

〒529-1814 滋賀県甲賀市信楽町田代桃谷300

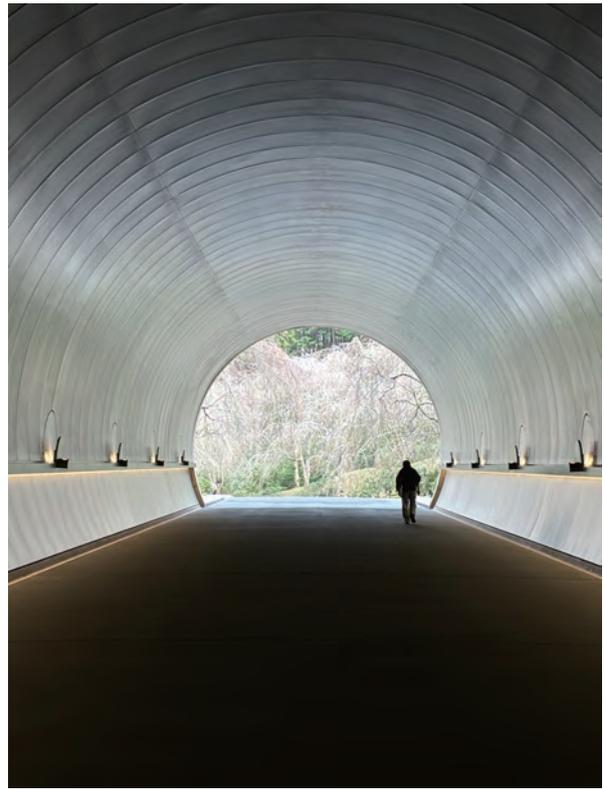


MIHO MUSEUMにて「春季特別展 古代ガラスー輝く意匠と技法」が開催された。そのとき私は丁度この時期に「銀化ガラス」や「森林ガラス」というものを知り、古代ガラスへの興味がこの上なく湧いていたため、展覧会を通し古代ガラスの歴史や制作工程、技法、ガラスならではの美しさを学ぶべく会場へ赴いた。

MIHO MUSEUMは滋賀県の山の中にある美術館であり、甲賀市の信楽町にある山を超えた場所に位置している。なかなか僻地ではあるが、午前中に行ったにも関わらず既に駐車場、バス停ともに多くの来場客で賑わっていた。それもそのはず、ここは美術館の他にもカフェや自然の絶景スポットとしても有名な場所であるからだ。中でも美術館へ行く途中道にある「時空を越えるトンネル」は超人気スポットで、桜が咲く時にはトンネルから広がる桜景色という絶景を見るために全国から人が来るくらいである。(残念ながら3月31日時点ではまだ蓄状態で、桜風景を見ることは叶わなかった)

さて道中のトンネルを歩いて抜けると美術館へと辿り着く。館内はとても広く、六角形を基調としたデザインが施されており、大きなガラス張りの窓からは山々の自然を見渡せた。

館内で見られる展示は2つあり、1つはコレクション展(常設展)、もう1つが企画展(特別展)という構成となっている。コレクション展では日本や中国、古代オリエントにわたるコレクションが常時約250〜500点ほど公開されており、コレクション展としてはかなり濃い展示物、展示量であった。



時空を越えるトンネル

本展では古代のガラス文化を各文明ごと、時代ごとに紹介されていた。ここでは展示されていた古代ガラスたちをいくつか選び、歴史や技法について簡略に紹介していく。

○第一章「古代エジプトファイアンスと王家のガラス」

エジプトの前21世紀〜前12世紀と推測されるガラスが立ち並ぶ。古代エジプトといえばピラミッドやクレオパトラ、ツタンカーメンといった煌びやかなイメー
ジの通り、宮殿や墓は金・銀・宝石・ガラスを使った装身具や奉納品が多く残
されている。また、当時のガラスは今私たちがよく見る透明のものではなく、
ぼつりとした不透明のガラスが特徴的だ。

○第二章「メソポタミアからエーゲ海へガラスの故郷」

世界最古のガラスは小さな塊で、メソポタミアで4000年以上前に存在した遺
跡から出土されている。また3200年以上前のものとされるガラスの製造法が
書かれた粘土板文章も発見されており、メソポタミアが人工的にガラスを加工
し出した始まりの地ではないかと推測されている。

○第三章「東地中海の輝きアイビーズとコアガラス」

題のとおり2600年前頃から東地中海一帯ではアイビーズとコアガラスの器
が多く作られた。紀元前でもコアガラスと鑄造ガラスは多かったが、手間の
かかる鑄造ガラスは高価だったこともあり、コアガラスという比較的作りや
すい製造技法のほう为主流となっていたのだ。コアガラスとは表面にはガ
ラスを引っ掻いて作られるマーブルのような模様が特徴的である。

またこの時代、ロッド技法でつくられたビーズや玉類のなかでも、ビーズに眼
玉のような模様のあるものをアイビーズと呼ぶ。眼には魔除けの意味をもつとされ
当時大流行していたそうだ。

各時代の技法について

第一章



河馬像
エジプト 前 21- 前 17 世紀
身体に葉の模様が描かれている。



セティ1世銘壺
エジプト 前13世紀初頭
ぼつりしたフォルム。

鑄造（エジプト前 21 世紀～前 12 世紀）

金属の鑄造のように、ガラスも鑄造をして形を作られていた。そのためぼつりとした風合いになる。表面は石像のように研磨され、宝石としても使われていたようだ。

第二章



植物文ペンダントとロゼッタ文ビーズ
エーゲ海地域 前 14- 前 12 世紀
不透明で淡い色味が可愛い。

型取り（メソポタミア 4000 年以上前）

石を削った型にガラスの原料となるものを入れて焼き上げる。主に着飾る装飾品として使われていた。

第三章



両手付小壺
東地中海地域 ロードス島か 前 6- 前 5 世紀
マーブルの発色、技巧が面白い。



同心円文ビーズ
地中海地域 前 6- 前 3 世紀
このビーズをいくつも重ねて
ネックレスにする

コアガラス（東地中海一帯 2600 年前頃）

金属棒の先端に粘土を丸くつけて、粘土が硬化したのちに作る壺の形に削っていく。その粘土の周りになるつぼで溶かしたガラスをコーティングする。その上から溶かしたガラスを線状に巻き付け、引っ搔いてマーブルのような模様をつける。最後に中の粘土を搔き出して完成させる。

ロッド技法（東地中海一帯 2600 年前頃）

金属棒に薄く粘土や剥離剤を塗り、そこにガラスを巻き付けてビーズを完成させる。



○第四章「アケメネス朝ペルシアと周辺の国々 無色透明ガラスの出現」

アケメネス朝ペルシアとは2500年前頃に存在した大帝國であり、この時代遂に無色透明のガラス器が使用されたと考察される。展示されている発掘されたガラスの品々をみると、動物をモチーフとした杯が何種類もあり、その精巧さには驚かされる。またガラスの器は近代作られたのものと見紛うものもあり、この時代からガラスの技法や精度には格段な向上が伺えた。

○第六章「ヘレニズムからローマ時代へ 新技法オンパレード」

2300年前のヘレニズム時代のガラスから始まる。ここでは新たな技法として「垂下法」が用いられ、鑄造法に比べて手間が格段に減った。さらにガラスの色が赤、青、緑と発色や色数が増えていた。中には部分的に金箔が使用されていたり、模様もただの筋線ではなく植物の文様が施されたり、カット装飾瓶で複雑な面が作られたりとガラス技術はさらに飛躍的に進んでいる。この素晴らしいガラスの発展はローマ時代に引き継がれ、更なる展開へと繋がった。中でもローマ時代に考案された「吹きガラス技法」はガラスの世界からすると革命的であり、その技術は今なお引き継がれ発展し続けている。第六章ではこれまでのガラス技術の進化がし続けてなし遂げた美しいガラスの品々と、吹きガラスの初期のものが見られた。

○第八章「ローマ帝國以降 日常のガラス器」

以来吹きガラス技法が定着した。その理由として吹きガラスで作られるガラスは一つを作るのに時間がかからず、簡単に作られるからだ。また形の自由度も高く、型に入れて吹けばどんな形でも成形可能となった。これまでの技法では作り得難かった首の細い形や、取手のついた形も容易に作る事ができるようになったのだ。この吹きガラス技法によって最も革新的だったことはこの容易に作られることから「大量生産できる品」となったことだ。これまでガラスといえば希少であり、高価なものであったが、容易に作られるようになったガラスの製品は多くの人が使用できるようになり、日常的に使用する生活用品としても見られるようになった。

第九章「ササン朝ペルシアからイスラームへ カットガラスを中心に」

1800年前頃の大帝國、ササン朝ペルシアからはカットガラス技法の品が特に目を引いた。カットガラス技法とは、名の通りガラスの表面をカットして幾何学模様を施す技法で、カット面は光の反射が美しく、まるで万華鏡のようだと例えられる。なかには正倉院に伝わったカットガラスの碗もあり、「瑠璃碗」「白瑠璃碗」と名付けられている。日本ではこの時ガラスは勾玉やビーズなどは国内で作られていたが、高度な技術は国外に比べると劣っていた。そんな中でみたササン朝ペルシアのカットガラスからは技術力の高さ、宝物のような美しさに驚かされたに違いない。

第十章「銀化の愉しみ」

銀化とは古代ガラスの美しさのひとつであり、ガラスが地中に埋まり、その土の成分や水によりガラスの表面に何層もの薄い膜が張られることで独特の風合いや特殊な光の反射を魅せるものを指す。そのガラスの銀化という変化とは十年二十年の話ではなく、数百年や数千年の時を経て見ることのできる奇跡のようなものなのだ。人の手では生み出すことのできない美に、今日も人々は魅力されている。

各時代の技法について

第四章



猛禽裝飾杯
アケメネス朝ペルシア 前5-前4世紀
鳥頭の精巧さに目が引く。



カット裝飾皿
アケメネス朝ペルシア 前4世紀
透明で蓮弁文が施されている。

ガラスの種類

アケメネス朝ペルシア時代 (2500 年前頃)

植物灰ガラス…4000 年以上前から作られてきた、これまでの時代で一番主流なガラス

ナトロンガラス…ナトロンという光を良く透過する性質を持った鉱物を加えたガラス。無色透明なガラスの制作が可能となった。

第六章



碗(宙吹き)
東地中海地域あるいはイタリア 1世紀



壺(宙吹き)
東地中海地域あるいはイタリア 1-2世紀



碗
東地中海地域 前2-前1世紀
半透明の瑠璃色が美しい。

垂下法 (ヘレニズム時代 2300 年前)

粘土を器の内側の形に成形し、そこに熱い状態で丸く薄く伸ばしたガラスを被せ、熱と重力で形を作る方法。

吹きガラス (ヘレニズム時代 2300 年前)

吹き竿と呼ばれる金属管の端に溶けたガラスを巻き取って、竿の反対側から息を吹き込んで成形する方法

第八章



把手付水注
東地中海地域あるいはイタリア 3-4世紀

第九章



切子裝飾脚杯
ササン朝ペルシア
あるいはイスラーム 6-7世紀

ローマ帝国以降

吹きガラスで成形したものに、溶かしたガラスを伸ばしつけて取手をつける。

カットガラス技法(ササン朝ペルシア 1800 年前頃)

ガラスの表面をカットして幾何学模様を施す技法

第十章 「銀化の愉しみ」

最後の章は撮影可能だったため、撮った写真を載せていく。



碗：東地中海地域 前2-前1世紀



この章では美しく銀化した古代ガラスが並んでおり、まるで宝石のような不思議な魅力に溢れていた。特に今回ポスターになっている東地中海地域前2-前1世紀の碗（写真上段）は見れば見るほど不思議で、色のある部分は見る角度によって変化した。まさに人の手では生み出すことができない、地中で自然が生み出した奇跡の品である。



「盆」展示即売会

花元、志村道具展

「盆」展示即売会

3月30日(土)・3月31日(日) 11:17時

It BOOTLEG gallery

東京都新宿区改代町 40

出品一 花元、志村道具店

《「盆」展示即売会》というものが東京新宿で行われた。「盆」展示即売会とは

一体どんなものであったか想像できるだろうか。界限が熱狂し、注目を集めた

「盆」展示即売会の様子と「木地盆」を紹介していく。

そもそも何の盆がそんなにも話題となったかという点、「木地盆」である。

更には言えば長年使われ、表面はすり減っているような骨董としての木地盆が今注目を集めている。これまで以上に注目を集めたきっかけは、2023年2月号

「目の眼」で木地盆の特集が組まれたことからより世間に知れ渡ったのではないかと考える。

「木地盆」とは木を挽いてそのままお盆にしたものや、表面に薄く拭き漆を施した簡素なお盆である。盆といえば漆塗りで表面に蒔絵や堆朱が施されたような厳かなものを思い浮かべるが、今木地盆という素朴な表情が乗せる酒器や器をより引き立たせ、味わい深いものに魅せてくれると人気を集めているのだ。



It BOOTLEG gallery

「盆」展示即売会



◀23番の整理番号

▼It BOOTLEG galleryの外からの様子



「盆」展示即売会

九州の矢部盆と古今東西の盆が長い時間をかけて選ばれ、約100枚の盆（漆器、鉢を合わせると123点）が東京都新宿区にあるIt BOOTLEG galleryに並ぶ。出品される100枚の盆は事前にInstagramで全て紹介されており、それを見てこればぜひ現地で見てみたいと思ひ足を運ぶことにした。

開場は11時からであったが、事前の告知に初日は午前8時より会場入口で順次入場整理券が配布されるとあったため、整理券が配られるとは一体どんな展示会なんだと思ひながらも、折角ならと三重から東京へ前夜入りし、朝から向かうことを決めた。この時、整理券が配られるような展示会は私自身初めてだったので、いったい何人の人が盆展に並ぶのか全く想像することはできなかった。結局私は8時5分に会場へ到着し、少し出遅れたかと思ったが無事に整理券を貰うことができた。貰った整理番号は23番であった。後から聞いた話では、早い人達は朝の4時、5時くらいから並んでいたらしい。

整理券をもらったついでに会場の前を見ると、外に面している扉は全て開かれており中の様子を見ることができた。今回会場となっているIt BOOTLEG galleryは元々40年以上製本工場として使われた場所で、コンクリの壁や床、250平米の広さからは工場であった名残が感じられた。そんなギャラリーの中に盆がずらりと並んでいる。展示台に置かれた盆、壁にかけられた大小様々な盆。盆がひしめき合うこの光景は異様ながらも気持ち躍った。

整理券の1番〜40番は、10時45分に再び会場入口に集合し11時に入場という流れだったため2時間半ほど付近で時間を潰した。集合時間には会場前に既に人ばかりができており、皆開かれた扉から目当ての品を見定めていた。全体でざっと40人前後はいたと思われる。

開場前に番号順に整列しなおし、今回の出品者から全体に向けて商品の購入の仕方、勘定場の説明がなされた。11時、いよいよ時間になると先頭から1人ずつ入場が始まった。争奪戦の始まりである。会場へ入れた者から目当ての盆まで小走りで走り向かう。皆の、その盆に向かっていく瞬時の勢いは驚くほど凄まじいものであった。

「盆」展示即売会



◀ずらりと並ぶ矢部盆

▼会場の様子（部分）



その場にいた客はひとまず目当ての盆をそれぞれの手で握りしめ、未だ購入の決まっていない盆たちをじっくりと吟味し回っていた。また購入制限はとくに設けられていなかったため、盆を数枚両手で重ね持つ人も数名おり、この盆展で木地盆の人気高さを実際に目の当たりにすることができた。

開始数分で会場の3/5ほどの盆たちが無くなった。これは朝から来ていなければ会場に置かれた盆の全体感を見ることはできなかつただろうと思いつながら、私もまだ置かれていた盆たちをじっくり見て回った。

今回の即売会は矢部盆の割合が一番多く、他には李朝の盆、角盆、ピューター丸盆、産地不明の木地盆などが出品されていた。朝鮮時代のものから江戸や、明治時代のもものが並び、盆のひとつひとつに個性があった。値段も手が出せるものから、盆でこんな値段がするのかもしれないものまでさまざまである。

整理券を配られた際に外から覗き見てわかってはいたが、盆が壁にいくつもかけられている空間はなんだか面白い。盆を見る角度で言えば本来は卓上であり、酒器やうつわが乗るものだ。言わば脇役の道具で、美術的にいえば展示台のようなものである。それが盆をみよ、と言わんばかりに壁に飾られていたのだ。

なるほど盆は道具として使うもよし、鑑賞するもアリなのかと考えた。

様々な産地の盆

木地盆は全国様々な産地で作られ、産地によっては形状や仕上げ方が異なり、個性豊かなものとなる。私が今いる広島県では宮島盆、九州産地では矢部盆、石川県では我谷盆、鳥根県では銀山盆、他にも藤原盆、糸目盆、李朝盆など実に様々だ。今回は手元にある我谷盆、矢部盆、屋久杉盆を手短かに解説していく。

産地

我谷盆 …… 石川県加賀市にあった我谷村

矢部盆 …… 九州地方の山々

屋久杉盆 …… 産地不明。樹種は屋久杉

「盆」展示即売会



朱漆は部分的に剥がれ落ち、木目を覗かせている



「盆」展示即売会で購入した欠けた矢部盆（江戸時代）



裏側高台部分

矢部盆の産地は九州地方で、木地師が九州の山々を歩き移動しながら作られた盆である。特徴：盆の裏に足や高台がつき、内側に朱色と外側に黒色の漆が塗られている。（稀に朱漆が塗られていない矢部盆もある）足や高台の形は作った職人によって変わり、三つ足のものや円高台のものなど様々である。材は栗の木がほとんど。

矢部盆



作：森口信一



我谷盆の産地は石川県加賀市で、昭和期にダムに沈んでしまった我谷村にて作られた盆である。我谷盆は江戸時代初期から作られており、栗の木からノミ一つでつくられることが特徴のひとつだ。表面に彫り込まれたノミの跡が美しい盆である。またダム底に沈んでしまった我谷村とともに途絶えかけていた我谷盆の復活に努めたのが、人間国宝木漆芸家の黒田辰秋であった。

我谷盆

「盆」展示即売会



盆表面の凹凸がおもしろい



屋久杉盆

屋久杉から作られた盆。屋久杉は江戸時代には活弁に伐採されていたが、2001年に伐採が禁止されており現在では滅多に作られることがない。この盆についてはどこでいつの時代に挽かれたものかわからないが、樹種だけは間違いないらしい。かなり使い込まれたもので、木の色合いが落ち着いており、木目と木目の間はすべてすり減り、木目と地の隆起の差が美しい盆である。

旅をとおして

今回は滋賀県、三重県、東京都を「工芸」と「古いもの」をキーワードに展覧会を回ってみた。MIHO MUSEUMでは古代のガラスを、gallery yamahonではテキスタイルの素材の繊細さを、BANKO archive design museumでは能野（種子島で焼かれていたやきもの。種子島焼とも。）という「幻のやきもの」の古陶を、「盆」展示即売会では木地盆の魅力を、青花の会では工芸のいまのかたちを、府中市美術館では仏教美術の古典美を知ることができた。私自身は金属を扱い作品を制作するが、金属以外の素材にもとても興味を持っており、今回の旅では金属以外の様々な素材と、その素材が持つ魅力をより深く感じることができた。またキーワードのひとつである古いものに関しては、古代ガラス、種子島焼、木地盆、仏教美術の絵画を見て、各時代の当時のものが、そのかたちを保ったままレプリカではなく実物が引き継ぎ残され現代でも見ることができると、その作られた時代から現代に至るまでのはるか長い時間が生み出した経年変化の美しさを今再認識することができた。これらはさらに何十年、何百年後と時間が経って、さらに色に変化したり、姿がすり減ったとしても人工的には絶対に造ることができない時間経過が織りなした美として愛でられ続けるのだろう。それはまた現代で作られている工芸品や民具も、姿は今の状態のままではないかもしれないが、紀元前から残る古代ガラスや、江戸時代や明治時代から受け継ぎ残された木地盆のように、未来に繋がり、かたちを残し続けられるだろう。そうなることを一作家として願っている。